

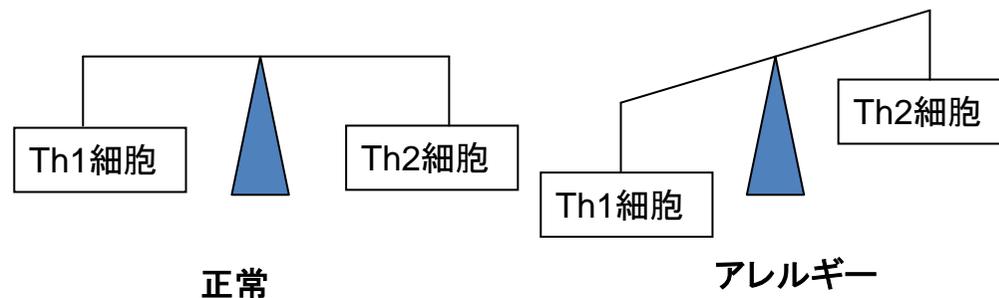
「アレルギーの基礎知識—アレルギーを知ってアレルギーを防ごう—」

元岐阜薬科大学学長 永井博弼先生 報告者 副会長 井上吉郎

12月2日、平成22年度学校環境衛生・薬事衛生研究協議会が東京で開催された。

アレルギー患者は年々増加しており、国民の1/3がその症状で苦しんでいる。最近免疫学の進歩で、アレルギーは免疫反応の行き過ぎで起ることが分かってきた。

免疫には自然免疫（Innate Immunity:マクロファージの食食による異物排除、NK細胞による抗がん作用等）と獲得免疫（Adaptive Immunity）があり、後者には細胞性免疫と液性免疫がある。細胞免疫には細胞障害性T細胞の産生に關与するTh1細胞（ヘルパーT）とIFN（インターフェロン）が、液性免疫にはイムノグロブリン産生に關与するTh2細胞とIL（インターロイキン）-4が關与していることが分かってきた。すなわちTh1細胞は細菌やウイルスなどの異物を攻撃、破壊して感染を防御する。Th2はカビやダニなどに反応してB細胞にIgE抗体を作らせる。正常状態ではTh1細胞とTh2細胞はお互いにけん制しあいバランスよく機能しているが、アレルギーではTh2細胞が過剰になり、IgE抗体が産生され、症状が発現する。このバランスは種々要因によってTh2優位に傾き、アレルギーが発症する。戦後わが国では多量の抗菌剤やワクチン接種によりTh1細胞分化を誘導する細菌感染やウイルス感染が減少してしまったこともアレルギーが増加した一因とされる。**環境因子**として1. 抗原の高濃度分布（舗装、気密性）、2. 大気汚染 NO₂、SO₂、ディーゼル排ガス粒子、3. 清潔すぎる環境、4. 食生活、対人関係などがTh2優位になる原因とされている。アレルギー症状の改善には仏教の抜苦与薬の考え方で薬を選択すべきである。抜苦（リーバー：症状改善）として抗ヒスタミン剤、与薬（コントローラー：QOL維持）としてはステロイド、抗アレルギー剤がある。抗原に接しないことが症状抑制につながるのでダニが抗原の場合、ぬいぐるみや布団を日光や布団乾燥機で高温処理後、掃除機でダニを吸引除去する。花粉の場合、入室する際には衣服やズボンの裾等をよく払い、花粉を家に持ち込まない、空気清浄機の設置など、抗原暴露に対処することが重要である。



アレルギー反応発症機序と抗ヒスタミン剤の主作用と副作用の発現機序

